

佐保河之水乎塞上而殖之田乎サホガハノミヅヲセキアゲテウエシタ尼作ニハヒトリナルベシ家持續カキツク

〔萬葉集略解八〕早飯は早稻の意にあらず、新嘗といはんが如くなれば、はついでいと訓べし、契沖はまもれるくるしといへるに同心して、さほ川の水をせきあげて、田にまかする人は、辛勞すれども、茹とりて後、わさいひに炊しぐ時は、其人ひとりこそはめといへるかといへり。

〔萬葉集十六〕有由縁井雜歌戀夫君歌一首

飯喫騰味母不在雖行往安久毛不有赤根佐須君之情志忘可禰津藻

右歌一首傳云佐爲王有近習婢也○下

〔書言字考節用集服食六〕飯ヲモ供御同温飯同日本御膳同禁秘抄

〔侍中群要三〕供朝夕御膳事

家女房召人六位稱唯參入仰云於毛乃微音稱唯乃即向御膳宿示召御膳之由了經御膳宿至于御厨子所亦同示召御膳之由訖更還於殿上西小戸上突片膝云於毛乃于時陪膳四位奉仕已下率來於御膳宿一一供之○註略 供訖取最後御盤之人奏事由其詞云於毛乃末又說云於毛乃須逐御所奏之略○下

〔侍中群要十〕奏御贊事近代釋尊 昨外不奏

下臈捧其物在前上臈在後問云何之物下臈答云其人乃進レ其乃御飯上臈云聞食下臈稱唯隨狀下給御厨子所若獻大盤所菓子類

〔源氏物語桐一壺〕ものなどもきこしめさずあさがれぬのけしきばかりふれさせ給て大床子の御ものなどはいとはるかにおぼしめしたればはいせんにさぶらふかぎりは心ぐるしき御けしきをみたてまつりなげく

〔源氏物語湖月抄桐一壺〕大床子のおもの禁中に大床子所とてあり机を二ツ立て其上に御